



(社)日本建築美術工芸協会 2009.8.

(社)日本建築美術工芸協会

No.56 2009. 8.

# CONTENTS

## aaqa 20周年記念事業

● 記念シンポジウム「よみがえる三菱一号館」 .....	1
● aacaフォーラム「日本建築美を創造する石州左官の匠の技」 .....	5
池本 孝 氏 池本工業(株) 代表取締役	
卯月展 .....	6
平成21年度通常総会 .....	7
● 特別講演「日本絵画の空間性—円山応挙の屏風・襖絵」 .....	8
樋口一貴 氏 三井記念美術館 学芸員	
アートパラダイス展 .....	10
aacaフォーラム「富岡製糸場と絹産業遺産群」見学会 .....	11
第19回 AACCA賞作品募集・第8回 芦原義信賞作品募集 .....	12
aaca主催展覧会「21世紀 絵画・手の仕事」 .....	12
新入会員・会員の移動・その他 .....	13

## 記念シンポジウム 「よみがえる三菱一号館」

開催日：2009年5月20日（水）  
会場：丸ビルホール  
主催：（社）日本建築美術工芸協会

### パネラー

河東 義之氏 元千葉工業大学工学部建築都市環境学科教授  
増田 彰久氏 建築写真家  
恵良 隆二氏 三菱地所（株）街ブランド企画部長  
三菱一号館美術館開設準備室長  
岩井 光男氏 （株）三菱地所設計 代表取締役副社長執行役員  
（株）メックデザインインターナショナル取締役社長

### 報告

野村 和宣氏 （株）三菱地所設計 主幹

### コーディネーター

鈴木 博之氏 建築家 青山学院大学総合文化政策学部教授



**司会（日高理事）** このシンポジウムは社団法人日本建築美術工芸協会設立20周年記念事業の一環として企画したものでございます。第1部は鈴木博之先生に、「三菱一号館とジョサイア・コンドル」と題して基調講演をいただきます。続きまして三菱一号館復元の設計を担当されました野村和宣先生にお話しいただきます。



第2部はテーマを「よみがえる三菱一号館」としてございます。コーディネーターは鈴木博之先生でございます。

**中島会長** 私どもの協会は建築にかかわる芸術的環境の創造と保存を図り、我が国の文化の向上・発展に寄与することを目的に設立され、本年度は20周年を迎えました。20周年記念事業として三菱一号館をテーマにシンポジウムを開催できますことを光栄に思い、参加された方々に感謝申し上げます。



一号館は丸の内全体を開発するキーステーションになったところと、伺っておりました。

竣工から72年後の昭和43年、残念ですが解体することになりました。当時は戦後の日本経済の好転に伴い、丸の内のオフィス機能の不足を満たすために再開発が進められ、一号館の開発のみが残されるということになりまして、その開発計画の担当に不肖、私が指名されてしまったわけでございます。

当時、文化財保護委員会より保存に関する要望書の通知もあり、またご存じの帝国ホテルの明治村移転という問題も現実化しておりました。一号館は事務所建築の日本の第1号と

して街並みを重視した建築でもあり、この場所にあることに意義があり、明治村移転については反対いたしました。結果として将来の復元を期して、資料として実測図、写真、また解体時の飾り金物などを開東閣に保存いたしました。

平成15年、旧三菱一号館復元検討委員会というのが設けられました。平成19年2月には復元する三菱一号館の活用計画が発表になりました。その後、困難な多くの問題を解決しながら、解体から41年後の今日、同じ場所に忠実に復元された姿を拝見いたしまして、夢のような思いで興奮いたしました。

**司会** 続きまして鈴木博之先生に基調講演をいただきます。

**鈴木氏** コンドルと三菱一号館を巡る世界をまずご紹介という形で進めさせていただきたいと思っております。

コンドルが生きていた時代というのは19世紀です。これはイギリスの場合にはビクトリア朝の時代で、イギリスが一番、華やかであった時代です。そうした時代の建築家が、日本で建築家としての全活動を行ったという例だと言ってしまうのではないかと思います。



その彼が何で日本に来たのか。日本政府が文明開化のためにお雇い外国人教師を呼んだということでございますけれども、コンドルにとっても日本というのは大変に魅力的な国でありました。それが双方にとって幸いしたのではないかと考えております。

1862年の万博以降、日本の芸術というのはヨーロッパでも非常によく知られるようになった。コンドルにとって日本というものの存在は大変、あこがれの的だったと同時に、も

う一つは地震というのが彼にとっては大きな課題になったようです。1891年に濃尾地震という明治時代最大の地震が起きます。明治20年代ですから近代建築がいくつも建てられて、こういうものが被害を受けたというので、建築界も大変に衝撃を受けた地震です。

コンドルは早速、出かけていきまして、スケッチを残しております。煉瓦造の建物も大変、大きな被害を受けています。コンドルは煉瓦造の中に帯鉄を入れるという補強をやっていますけれども、濃尾地震がいろいろな意味で教訓になったのではないかと考えております。

三菱一号館はもともと第一級の煉瓦造で、濃尾地震の経験を踏まえた煉瓦造ですから、関東大震災でも壊滅的被害というのを受けていないものです。コンドルは一号館に至る以前から、岩崎家や三菱との関係は非常に深く、いろいろな住宅をやっているわけです。

これは初期の段階ですけれども、現実に建ったものが重要文化財で残っている岩崎久弥邸です。こういう形で彼は日本風のデザインというのでも試みていますし、日本という意識は残っていたように感じます。

これが開東閣という三菱の弥之助邸だったものですが、現在は三菱グループの迎賓館になっているものです。大変に豪華な建物で、これは末期のコンドルの作品です。これは三井倶楽部です。最初はゴシック様式で修業をした建築家ですけれども、最後のころの作品にはちょっとバロック的な変化というのが見える華やかな作風に至っているというのが、コンドルの軌跡だと思います。

これが岩崎弥之助、小弥太の岩崎家の霊廟です。コンドルが弥之助の亡くなられた後、設計をしたものです。コンドルと三菱の関係の、ある意味では一番最後の花向けというような感じのする、非常にすばらしいデザインではないかと思えます。

**司会** 続きまして野村和宣先生に、三菱一号館復元の計画から工事に至るまでのお話を伺います。

**野村氏** 三菱一号館の復元の計画と工事につきまして、ご紹介させていただきます。三菱一号館は事務所建築です。明治25年に着工いたしまして、27年の12月竣工ということで、2年半から3年の工期でございます。ジョサイア・コンドルと、その弟子であります曾禰達蔵が現場主任としてやっております。



復元に当たりましては、当初の図面、設計図だとか竣工後のトレース図だとか、資料に基づきまして忠実に復元をしていくということを行いました。基本的には現代建築で、いわゆる基準法上、新築建物になりますので、安全性、バリアフ

リー、設備活用のための最低限の改変を行うということで方針を立てまして、最終的には美術館としての設計をして、それを重ね合わせるというような作業でございました。

平面構成はこのようなし字型になっておりまして、左側が中廊下式のプランになっております。左の下の隅のところは吹き抜けておりまして、銀行部の営業室



ということになります。右側の部分に縦に赤い壁がいっぱいありますけれども、棟割り長屋ということで、貸事務所部分です。玄関もたくさんございました。玄関から入って、地下1階から3階まで縦に貸すような貸事務所でございました。

復原建物なのですが、現行法に合わせるために免震構造とし、基礎から下は改変をいたしまして、免震を置いて、その上に煉瓦造を積み上げております。それから木造の小屋組についても防火地域で木造の小屋組みを成立させなければならないということで、防火区画を設けまして、屋根全体の耐火の認定を取って成立させております。

中については銀行営業室だとか廊下だとか階段というところを忠実に復元をしております。シャンデリアなどもガス灯であることが分かっておりまして、ガス灯を忠実に復元しています。玄関は床が石で、壁が漆喰、天井が木という形になります。一つひとつの煉瓦を成型しなければならないということで、上海から西に約250キロ行ったところに長興という焼き物の町がありまして、そちらで焼いています。

煉瓦職人は日本中から集められまして、特に技能のある方、熟練工の方は化粧煉瓦、表面の煉瓦を積むようにしております。

一号館は煉瓦造ですが、入口回りだとか窓回りに装飾の石がはめ込まれております。

今度は木造の小屋組です。奈良県の橿原市で加工しております。次がドーマー窓です。ドーマー窓は昭和43年の実測図がございませんでしたので、基本的には写真から復元をしております。すべて銅の板金になります。

棟飾り、あるいは避雷針。すべて再現材でやっております。

こちらは棟飾りの鋳物です。棟飾りは実際、オリジナルのものが残っていたので、再現をしております。野地板の上にスレートを張って屋根が完成いたしました。内装材では代表的な営業室の円柱の柱がございましたけれども、これもオリジナルのものが残っていたので、それを見ながら彫刻していただきました。以上で説明を終わりたいと思います。

**司会** 第2部といたしまして、パネルディスカッションを開始させていただきます。

**鈴木氏** 各先生方からお話をいただきながら、パネルディスカッションを行ってまいりたいと思います。



**河東氏** 今回の復元の一番大きな特徴というのは先ほど、明治27年の時点での構造を、基礎を除いてなるべく正確に再現するという点にあったようです。復元によって、今から115年ほど前の明治の煉瓦造建築に込めたコンドルの思い、地震の国、日本における耐震的な煉瓦造の完成、そういった技術的な面がかなり明らかにされたということが、大きな意義であろうかと考えております。

一号館の工法を、基礎と壁と床と小屋というふうに分けてみました。基礎は免震工法が採用されて、コンドルは来日以来、我が国の軟弱な地盤上でさまざまな工夫をしております。

板杭というのは建物の周囲にぎっしりと杭を打ち込んで、水や泥の流入を防ぐ。それから捨算盤は格子状に組んだ横木でございます。

それから杭打ち地業というのは基礎の下にぎっしりと杭を打ち込んで、せいぜい4、5メートルですからもちろん固い層には当たりませんので、ぎっしりと打ち込むことによって摩擦力で基礎を支える。その二つの工法。最終的に板杭と摩擦杭と、それから捨算盤とその上にコンクリートを流し込んで基礎にするという、最も完備した基礎工法をとったものが、この三菱一号館でございます。



次に壁体、壁のほうですが、組石造ですので、壁が非常に厚いです。この棟割り長屋方式の平面図を見ていただくと、梁間方向に非常に多くの間仕切り壁が設けてございます。このうち4枚は天井まで達する防火壁になっておりますが、同時にこの壁の多さが耐震壁にもなるという考えをしております。耐震補強に関する提案書の中に、縦に鉄筋、丸鉄を入れて、横に平たい帯鉄を入れて組み合わせるといった耐震予防方法を提案しています。

その次が床組でございます。I型鋼と生子鋼、生子鉄板を組み合わせ、その上に軽量コンクリートを打っています。

最後に小屋組でございますが、翌年、工学会で震災予防の提案の講演をしておりますが、小屋組の桁行方向をがっちり支えるべきだということを提案しております。

**鈴木氏** 続きまして増田先生にお話をいただきます。

**増田氏** 私が三菱一号館が取り壊されるという情報を得たのが、昭和41年の夏を過ぎたころだったと思います。

ちょうど昭和40年というのは東京オリンピックが終わって、その勢いで東京中がまだまだ工事現場と言いますか、古い建物をどんどん壊して、新しい建物を建てていくということのがんがんやりました。普段、ピカピカの現代建築、大成建設が施工したものを撮っていたのですけれども、この建物を見ていくと、現代建築にないいろいろなものが見えてきたのです。私は建築をやっていないのですが、まず最初に3階建ての建物を見て、この建物はオフィスビルなのに屋根があるんだなというところから始まって、1階、2階、3階の窓のデザインが違うんだとか、道路に面した壁がでこぼこになっているとか、入口がいくつもありませんけれども、その中でもクラス分けがされているんだとか、現代建築にないものを非常に感じて、これはおもしろいものだなというふうに思いました。ちょうど明治100年、これは昭和43年ですけれども、元旦の朝日新聞に別冊みたいなのが来て、それをめくっていたら小さい記事で、村松貞次郎さんの「残したい明治の建築」というリストがあったんです。それで初めてこういうことを研究されている先生がいるんだということで、どんどん電話を掛けて、私の撮った東京にある赤煉瓦の写真を見ていただこうと思って、その先生のところに行ったのです。



帰るころになって、8×10で伸ばしたモノクロの写真で今、ここに出ている写真を、もう一度、見せてと言われました。その写真を見て急に、増田君、これはいい建物なんだよと言って先生は急に怒りだしました。僕はコンドルのこの字も知らないで撮っているのですけれども、自治省は金があるのにこんなものを壊すか、というような話を僕にするわけです。一号館は明治の法隆寺だよ、東大が安田講堂を壊すか、早稲田が大隈講堂を壊すかとかんがん言い出して、僕に言われてもしょうがないと思うのだけど、そういうふうなことを言っておられました。

**鈴木氏** 大変、貴重な証言でした。恵良さんは三菱地所の立場でこの一号館のプロジェクトの舵を取って来られて、今度は美術館として活用されて行く方でいらっしゃいます。

**恵良氏** 今日、お話ししたいのは、美術館という新たな用途ということ。もう一つはその結果として出てくる一号館美術館とはどういう対応をしたか。3点目は美術館と街との関係です。

復元する価値とは何だろうか、まずコンドルの作品であっ

たこと、貸オフィスビルの原点であったこと、そして丸の内というオフィス街の原点であったことです。また復元というプロセスを通して、コンドルの設計の思想の新しい解明ができるのではないかと。当時の技術の一つひとつ積み上げる中で、未来につながる物作りの技術を解明する。



復元してどうするのかという狙いなのですが、復元した建物の空間体験を通して、建築と街の歴史を人々に伝える。中に入ってもらって、その空間を体験していただくこれは今後の用途につながる重要な視点になります。まとめますと、この場所にあるということ。場所性を踏まえて全館を一つの用途にする。公開性、公共性を持つ、歴史、文化に触れるというような形の用途を選ぶ。美術館という視点になると、三菱一号館の特徴は立地があります。都市活動の中心に生まれてくる美術館であるということです。街の歴史の原点に復元される歴史性のある建物。これをしっかり生かしていくということです。

美術館と街との関係はどう考えるのか。

1点目は街と歴史とのかかわりという視点でございまして、歴史を継承し、未来に向けた新たな街固有の資産となる。

2点目が都市機能とのかかわり。多様な都市活動の場である丸の内の都市文化形成の拠点にしていく。基本の機能は当然、ビジネスが主役であって、そこには商業とか文化、交流、いろいろな機能があります。

3点目が働く人、あるいは企業とのかかわりです。ビジネス街に働く人々に芸術との触れ合いの機会を提供する。これはもしかしたら癒しの場であったり、何か新しい発想をするヒントになる。

4点目は社会とのかかわりということで、多様な人々に芸術との交流を通じて活力と癒しをもたらす。都心に来られる方々に来ていただきたい。24万人がこの街で働いております。さらに多くの人々が訪れる都心であるこの丸の内。そこにはおそらく多くの美術のファンが行き交っていると思います。

**鈴木氏** それでは次に岩井さんからの話をいただきたいと思います。

**岩井氏** 今日は三菱一号館というテーマで、街作りの中での一号館という話をさせていただきたいと思っています。三菱一号館がどのような形で決められたかと言いますと、ジョサイア・コンドルと曾禰達哉と荘田平五郎、この3人が丸の内にどういったビジネスセンターを作るのかというところから、この丸の内の歴史は始まったと考えています。

明治27年に竣工するのですが、着工は25年で、私どもの

社内史ではその当時、馬場先門の石垣のそばから馬場先通りを見て、将来、この街をどういったビジネスセンターにしていくのかという話を3人がする中で、軒高15メートル、当時、50尺と言っていましたが、その軒高の煉瓦造りのオフィスビルを作る。荘田平五郎はロンドンのロンバート街のビジネスセンターをモデルにして作るというイメージを持っていましたので、その3人の意見がそのような形で一致して、この丸の内の街作りが始まりました。

今回、三菱地所の第2ステージということでこの三菱一号館の敷地の開発が決まったわけですが、残念ながらその時にはもう赤煉瓦のオフィスというのは全部、ありませんでした。三菱一号館というのは煉瓦一つをとっても、人が触って現場で積まれてというような形で建物が建っていくという中で、できあがったものに人間のぬくもりを大変、感じるわけです。近代建築、大きなビルはガラスとか鉄とか、そういうもので組み立てられますけれども、そこら辺で人間の心の温かさの違いが建物にあるのではないかとこのように私は感じています。



それから人手を掛けた、人のぬくもりを感じる空間。丸の内では機能的であって、整然とした街で、ビジネスのやりやすい街であることは大切なのですが、やはり今度の三菱一号館の中庭に象徴されるように、人間のぬくもりを感じるものを街の中に入れていくということ。

この写真を見ていただくと、大きな木の高さで軒高15メートルというのは、ほぼ同じようなレベルに達しているのです。ということは、これから環境の時代と言われてはいますが、非常にヒューマンスケールな建物であるということも、人々に親しまれる一つの大きな要素ではないかと思っています。

これからの街作りの中でこういった人間的なスケール、それから人のぬくもりを持った材料を組み入れながら街作りをやっていくのが大変いいことなのだということが、私が今回、三菱一号館の仕事に携わったことによって感じたことだと思います。



開催日：2009年3月26日  
会場：アトリエユニオン  
主催：(社)日本建築美術工芸協会  
講師：池本 孝氏(池本工業(株)代表取締役)

## aacaフォーラム

# 「日本建築美を創造する石州左官の匠の技」

ご紹介頂きました島根県大田市仁摩町出身の池本でございます。

これより私の先輩である石州左官の優れた技とその足跡について話してみたいと思います。

石見地域は山々が日本海の海岸線まで迫っており、平野も少なく耕地面積も狭いため山間部の集落も多く農業、漁業やその他の産業にとっても生活していくことが、大変厳しい地理的、経済的な環境であります。昔より、生活するためには一家の中で二男三男対策として出稼ぎが大変大きなウエイトを占めていました。一家の中では長男は家業の農業か漁業を継ぎ、これといった産業も少ないため資本のいらぬ腕に職を付けておけば、一生食いはぐれのないということで、大工、左官になった訳であります。

石見地方は又厳しい気候風土の環境に耐える土地柄でして、これが子供の時から身に付き、競争心や忍耐する根性も自然に育んでいったものと思われま。

一度弟子になれば家が経済的にも厳しい状況ですから絶対に後戻りは出来ない。そしてこのまま帰ってしまったら二度と職に就けない。又、生活できない。だから何としても一人前、いやそれ以上にならなければならないという根性(やる気)。自分が努力するしかないという生活背景があったわけです。お互い職人同士で技を競い合い、それによって他の人より多くの収入を得たいという気持ちが技の習得をより早くし、技の研究心を強くしたことが石州職人の技を大きく成長させた要因ではないかと思えます。

又、地域としても技能に対する取り組みがされていたと思います。因みに大田市馬路町には昭和53年編集の馬路教育史によれば大正5年に実業補修学校を小学校に併設し大正9年には馬路村工業専門研修学校、土木課・左官課が出来、実習室も設置され、そこでは小学校の卒業生が2年間の教育課程で実習を受けたといひます。

この様に一地域として、又村をあげてのこの様な取り組みは、その当時としては大変素晴らしい事ではなかったかと思ひます。又、同じ馬路町出身で当時左官の神様と言われた松浦栄吉氏(1858~1927)は明治・大正中期にかけて東京駅、日本銀行本店等の有名建築に腕をふるい、その名人芸は都内でもあちこちに残っています。

又、昭和20年代半ばですが、大田市仁摩町出身の今は故人ですが花田兄弟は内部仕上げの天才と言われています。天井蛇腹引き工法では他の職人の真似出来ない技能の持ち主

とされています。

このように石州左官は明治、大正、昭和に国内及び海外にも洋風建築における左官仕上げの代表的建物に携わり、欧州の建築工法に挑戦したすばらしい職人集団と思ひます。

国内での活躍、特に都内に於ける石州左官の活躍した建物としては、日本建築の最高技術の結集作と言われる国会議事堂、迎賓館、重文指定された明治生命館を始め丸の内界隈の多くの建物に携わっているといひます。

世の中には色々な縁(つながり)がありますが、左官の技の取り持つ縁として首都圏と島根石州のつながりについても言えると思ひます。

島根の寒村出身の石州左官の優れた技によって当時の国会議事堂や日本銀行本店や丸の内周辺の数々の建物にそのすぐれた技をふるわれた先輩たちの仕上げた建物、又首都圏や丸の内等の建物が赤レンガ街から近代的ビジネス街へと生まれ変わり、老朽化あるいは都市計画によって新しく建て替わっていく工事に石州出身の我々はその施工に携わることが出来たのも、技による強いつながりを私は大変意義深いものとして強く感じているところであります。

この伝統の石州左官のもつすばらしい職人氣質や優れた技は、今後共後輩達に引き継いでいくことも我々の大事な義務だと思ひます。



明治生命館



国会議事堂

## 第3回 卯月展

開催日：2009年4月13日～19日  
会場：建築会館1階・建築博物館 中庭  
主催：(社)日本建築美術工芸協会

雨山智子（テキスタイル造形） 内田滋子（彫刻）  
片岡雅子（七宝） 佐藤静子（布・染・織）  
中村弘子（ステンドグラス） 野口真理（陶）  
山崎輝子（皮革造形） 渡邊たまえ（彫刻）

第3回卯月展はコンセプト「生活空間を意識し今を表現する」を発展させ「伝えたい心～人と自然を繋ぐ空間の中で」をサブテーマに行われました。

今回の展覧会は作家の思いを出し合い話し合いを重ねサブテーマが決まり、パネルでテーマに添った文章と絵や写真で表し会場に展示しました。来場者に作家の思いをわかりやすく伝えるところみです。会期中、作品とパネルを行ったり来たりしながらじっくりご高覧いただいている姿が多く見られました。

オープニングパーティーではテーマのきっかけともなったパーカッションニストによる波紋音（創作楽器）の繊細な音域の演奏が静かにイベント広場をみだし皆さまと和やかな時間をもつことができました。ギャラリー内では建築家の協力により提供された個人住宅をもとに、参加作家其々が作品でコラボレーションファイルにまとめ紹介しました。

卯月展一同



波紋音演奏



オープニング風景





# 平成21年度通常総会

## 開会挨拶 加藤副会長

お忙しい中、大勢お集まりいただきありがとうございます。

今回の眼目は創立20周年ですが、先だって行いました三菱一号館のシンポジウムで、20周年記念事業を滞りなく終わることができました。

創立20周年、人間でいえば成人に達し、新しい21年度からは新生面を開拓していくことが重要です。

これからの協会の活性化に向けて、一層のご協力をお願い致します。



加藤副会長

## 議長挨拶 中島会長

aaca設立20周年を迎えた昨年度は、役員ならびに各委員会の皆様をはじめ、会員の方々の大変なご協力とご指導のお陰で、多くの記念事業、20周年記念誌の編さん等、成果を上げることができました。



中島会長

しかし、私どもを取り巻く環境の変化を考えますと、いまこそaaca設立のときの文化国家を目指すことを目標に、大変視野の広いそれぞれの分野の方々が集まって始まったということをここで再確認いたしまして、aacaの今後のあり方を会員の皆様と考える絶好の機会ではないのかなと、私は考えております。

## 通常総会

1. 日時 平成21年6月11日(木)
2. 場所 建築会館1階ホール
3. 出席会員 225名(出席59名、委任状提出者166名)  
正会員総数434名の過半数を超え、総会は成立
4. 議案の経過  
第1号議案 平成20年度 事業報告に関する件  
・総務委員長より報告され、賛成多数により承認可決された。  
第2号議案 平成20年度 貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支決算書に関する件  
・総務委員長により報告、監事による監査結果が報告され、賛成多数で承認可決。  
第3号議案 平成21、22年度理事選任に関する件  
・議長より報告、異議なく選任され決定、就任の承諾がされた。  
第4号議案 長期会費滞納会員の取り扱いに関する件  
・総務委員長より報告され、賛成多数で承認可決。
5. 平成21、22年度役員(あいうえお順)  
理事 芦原太郎 芦原太郎建築事務所代表  
" 岩井光男 (株)三菱地所設計副社長  
" 宇津野和俊 菊川工業(株)会長



- " 岡 房信 三井不動産(株)建築企画部長
  - " 岡本 賢 (株)久米設計会長
  - " 大野 勝 (株)佐藤総合計画専務
  - " 尾崎 勝 鹿島建設(株)建築設計本部本部長
  - " 加藤貞雄 美術評論家
  - " 可児才介 大成建設(株)専務
  - " 佐野吉彦 (株)安井建築設計事務所社長
  - " 澄川喜一 彫刻家
  - " 中島昌信 建築家
  - " 中村光男 (株)日建設計会長
  - " 西村征一郎 建築家 aacaかんさい代表
  - " 押部隆利 TOTO(株) コミュニケーション本部本部長
  - " 日高單也 日本大学生産工学部教授
  - " 村松映一 (株)竹中工務店顧問
  - " 六鹿正治 (株)日本設計社長
  - 監事 飯野毅一 美術コンサルタント
  - " 安河内敦子 (株)意匠設計代表
- 以上、計20名

## 6. 報告

- ・20周年記念事業について、記念事業委員会岡本委員長により報告された。
- ・平成21年度予算総会にて承認された21年度事業について、及び、公益法人制度改革に伴う手続きの経過について、総務委員長により報告された。
- ・議長報告 第1回理事会を開催し、互選により会長・副会長が重任された。

## 閉会挨拶 澄川副会長

二十歳の記念事業が、委員の方、それから岡本委員長を中心に、会員の皆様のご協力、成人らしい会ができたと思っております。これも皆様のご協力のお陰で、感謝いたします。



澄川副会長

これから大人の世界に入りますが、本当の大人になるかどうか、この2、3年が勝負です。当初の出発は、懇親を深めるということです。芦原会長のお言葉を思い出しますが、文化力は国のほんとの実力だということです。

この会も文化力を高め、力を出そうということです。皆様のご協力、発展していくことを祈念して、閉会のごあいさつとさせていただきます。

## 特別講演

# 「日本絵画の空間性 — 円山応挙の屏風・襖絵」

開催日：2009年6月11日（木）  
会場：建築会館1階ホール  
主催：（社）日本建築美術工芸協会  
講師：樋口一貴氏  
（三井記念美術館学芸員）



樋口一貴氏

円山応挙は、18世紀に京都で活躍をした画家で、自分の絵の中で空間をつくり出すということを江戸時代で一番強く意識した画家ではないかと思うのです。

円山応挙は、18世紀後半の京都で一番評判の高かった絵師です。狩野派は、室町時代から続く日本のアカデミズム絵画です。円山応挙もそういうところから入ったのですが、その後、滋賀大津の円満院の祐常と知り合いになり、その人のもとで、この世にあるもの、森羅万象をそのまま記録しようとする考え方に触れ、写生というのを学びます。お手本を写すのではなく、実物を見て写そう。そうやって培ったものが、中年以降、応挙の画風として花を開きます。俗に写生画といわれるもので、写生のテクニックを用いて、それを伝統的な日本画の中で表現しているものです。特に応挙の絵を見ると、それが立体的な空間の中に描かれています。応挙は町人にとっても人気があり、その中でも第一のパトロンとなったのは、我が三井家なのです。

応挙の絵画をこれから見ていきますが、これが若い頃アルバイトで描いていたという眼鏡絵です。京都の「三十三間堂の通し矢」が描いてあります。

これは応挙が円満院祐常の下で描いた、孔雀（くじゃく）の絵です。面白いのは孔雀がここまで写生的なのに対して、その孔雀が立っている岩や横にある牡丹（ぼたん）、これは従来の伝統の線描による描き方になっているところ。写生と伝統的な描法というのが融合している。ここは応挙の絵の面白いところです。

応挙のこうした空間性、写生ということを前提とした大画面を見ていきたいと思います。これは「雲龍図」、1773年です。実在しないはずの龍が、やはり写生的な、まるで実物のように描いている。応挙の写生は、実物をそのまま実物であるかのように描くというのを突き詰めていった結果、実在しないものまでも実在しているかのように描く、そういうテクニックを手に入れている。応挙はこの中で、やはり空間を意識しております。



三井記念美術館展示室

奥行を意識した屏風をいくつか続けて見ていきます。これは三井記念美術館にある「山水図」。真ん中に何も描かれていない余白があって、そこが水面になっています。全体として丸く見えて、実は奥行のある、立体感のある水面になるという。応挙のこういう屏風の場合は、このパターンが多いのです。真ん中に余白があって、それが平面の余白ではなくて、立体の余白になるような描き方をしている。

安永5年の京都圓光寺の「雨竹風竹図」は、水墨画の屏風ですが、やはり立体的な空間を意識させる描き方となっている。

これは金地の屏風ですが、とても華やかで装飾的な感じがいたし、むしろ平面的に見えるのですが、そこでも空間、立体感というものを描ける、再現できるというのは、やはり応挙の実力でしょう。

そして、これが私どもの美術館で持っています「雪松図屏風」というものですが、これは水墨です。絵の具を使っておらず、金と墨だけです。あとは紙の白。ここにやはり空間が生まれていますよね。老いた松と若松、これが手前へ、奥へという関係になっています。応挙の得意とした構図形式です。

襖絵は、元々の鑑賞空間を考えると、かなり限定されたものになってきます。これは「蘭亭曲水図」といって、中国の王羲之ほかがお酒を飲みながら詩をつくる場所を描いています。こうやって襖を真横に並べてしまえば、普通の平面的な絵画のように見えるのですが、現状から考えると、恐らくはこんな感じで曲がっていたはずなのです。

画家は襖絵の制作の依頼を受けるときには、どういう建物かというのはもちろん知らされて、これを計算しながら描きます。そういった意味では襖絵というのは、元々の曲がり角を、再現しながら展示するに越したことはないのですが、なかなか美術館のガラスケースではできません。

これは讃岐の金比羅山で、虎（とら）が遊んでいる。よく水呑（みずのみ）の虎といわれるのですが、元々白地に墨で描いてあったのに、金をつけたので、少し装飾的になりすぎ、かえって立体感が乏しくなっています。

お寺にある応挙の絵で代表的なものは、山陰線香住の大乗寺。ここはお寺自身が応挙と応挙の弟子たちの美術館になっていると言ってもいい。仏間を囲むように孔雀の間、芭蕉の間、山水、藤、鯉（こい）、狗子（いぬこ）、仙人、使者、農業とありまして、それぞれに応挙およびその弟子たちの絵があるのです。実はこの置かれている空間自体が、とても意識されたものでして、仏間の本尊が十一面観音、農業の間は持国天、芭蕉の間は増長天、山水は広目天、仙人は多聞天というように、四つの方角を司（つかさど）り立体的な曼荼羅（まんだら）になっている。

最晩年、没年に描いておられます孔雀の間、「松に孔雀」ですね。実際に、コの字型に「松に孔雀」が描かれたところに行きますと、ちょうど角にあたる場所に、やはり松の大木があり、ちょうど盛り上がりを見せてくるのです。しかも、和ろうそくの柔らかい光で見ると、この畳の色と金の色が同じになってつながってしまい、金が金として存在しなくなり、単なる空気になるのです、畳の色と金色の調和、これがあって、広々とした空間に、松の生えている空間に孔雀が遊ぶ、というふうに見ることができるのです。応挙の建物と鑑賞空間を意識した絵画の最たるものとして、最高傑作だと思っております。



樋口氏 講演

最後に、美術館の鑑賞空間を一つだけお目にかけてたいと思います。三井記念美術館の一番広い部屋は、奥行きが15、6メートルあり、ここは絵画のためにつくりました。正面に屏風が入るように、しかもガラスの切れ目のない、絵にはかからないようにしてあります。15メートルくらい奥行きがありますと、両目の中に屏風全部が入ってくるのです。そうすると、ここの空間を非常に意識しやすくなるのです。遠くから見ていただきますと、朝の光を浴びて金色に光る雪の結晶の中に清潔な松が立っているという冬の朝のすがすがしい気分、空気までピシッと背筋を伸ばすような、そういった空気を感じてもらえるのではないかな、というふうにつくっております。

これが、画家は意識していないかもしれませんが、我々展示をする側の考えた鑑賞空間、現代の空間というところ です。



懇親会



懇親会

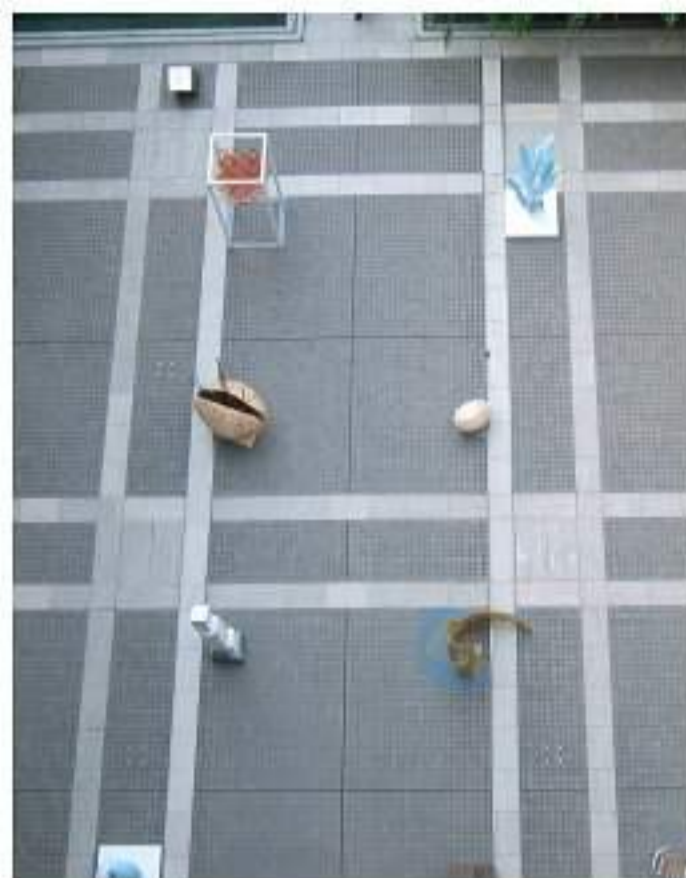
# 第13回 アートパラダイス展

開催日：2009年6月15日～27日  
 会場：建築会館1階・建築博物館 中庭  
 主催：(社)日本建築美術工芸協会

7人の作家はそれぞれが違う素材を扱い、違う主義主張を造形表現しているが、同一空間に作品を展示することの意義を理解しながらの制作であり展示である。その時建築会館の公開広場に作品を設置することは、この建物が持つ基本的な空間の意味、目的を浮き彫りにしながらより気持ちのよい空気が漂うことを希求したのである。



安河内敦子(造形作家) 古川 潤(彫刻家) 関 玄達(造形作家)  
 厩屋 正(プロデューサー) 山本秀明(美術家) 大河内久子(彫刻家)  
 川原 昭(造形作家) 鍵井保秀(アーティスト)



## 「富岡製糸場と絹産業遺産群」見学会

7月の初め、梅雨真っ盛りの中、文化遺産(産業遺産)のまち群馬県富岡市へ。

参加者23名、新宿を朝7:30出発、富岡製糸場に10:00到着。

同市は、明治5年に政府の掲げた二大政策「富国強兵 殖産興業」の一翼を担うべく、日本初の官営工場「富岡製糸場」の誕生以来、製糸産業で栄えてきました。

富岡製糸場はヨーロッパの建築技術と日本独自の工法が融合してできた建築物で、現在も圧倒的な存在感で訪れる人を魅了しています。

ユネスコ世界遺産暫定一覧表に記載され、旧富岡製糸場を中心とした富岡市近辺の絹産業遺産群は、当時のレトロでノスタルジックな世界を感じさせています。

当時「生糸の輸出振興と品質向上」が政府の主な政策のひとつとなっていました。外国からの買い付けの急増は粗製濫造を産み出し日本の生糸は評価がさがっていました。

そこで明治3年政府自ら模範となる製糸工場建設することとなりました。

富岡付近は生糸を作るのに必要な繭の確保、工場建設に必要な広い土地が用意でき町民の同意があったこと、また製糸に必要な水の確保、燃料の石炭が近くの高崎・吉井で採れるといった条件がそろいこの地が選ばれました。

工場建設は明治4年から始まり、翌年7月に完成。製糸場は当時、世界最大規模を誇っており、製糸場には300人ほどの製糸器が置かれ、全体で404人の工女達の手によって本格的な器械製糸が始まりました。

工場建設を指導したのは明治政府に雇われたフランス人のポール・ブリューナで彼は、建設地を富岡に選定し、フランスから技術者を連れてきて、洋式の器械を日本人の体格に合うよう注文してとりよせました。

建物の設計は横須賀製鉄所建設にかかわったフランス人のオーギュスト・バスチャンが担当、富岡製糸場はフランスの技術を日本に合わせた工夫を加えた工法を採用、この建築上の最大の特徴となっています。

これは、木材で骨組みを作り、その間にレンガを積む木骨レンガ

を積む木骨レンガ造で建てられていることです。

通常我々が想像するレンガそのものを積み重ねて壁が構造壁となる組石造とは異なる点です。

主要資材は礎石、木材、レンガ、瓦で構成され鉄枠のガラス窓や観音開きのドア蝶番などはフランスから輸入、中心となる材木の杉は妙義山、松は吾妻から、小さい材木は近くの山林から、礎石の石材は連石山から切り出し、数十万個というレンガはブリューナがかかわる職人に教え込み福島町に窯を築いて焼き上げました。レンガも目地は下仁田町の石灰を主材とした漆喰とし、フランス積みで建造物に流麗さをもたらしました。

もうひとつの特徴は、トラス組みという構造材が三角形を作るような小屋組みを採用、工場の用途に適した柱の無い広い空間を可能にしました。

バスチャンの設計自体は、巨大な建築である以外は特に目立った工夫や凝った意匠はなく、まさに実質本位の設計と感じました。

ただ、この質実剛健なスタイルは当時全盛の「様式建築」と呼ばれる規則的な装飾を全体に施した洋風建築に比べるとむしろ異様なものがあったのではないだろうか。

ある意味では、後のモダニズム(現代建築の飾りの無いビル)に通じる潔さを持っている建築であると思います。

このまちを歩いて観て得たものは、歴史を感じさせる建物並び産業建築群が保存され、しぜんに利用されていることです。

そこに行政と市民の熱い思を感じたし、そこに住む人々が深く関わって営々と創り続けてこそ「いいまち」が出来ていく、その実像を見ることによって受けた感動は私にとって得難いものでした。富岡のまちの人たちの努力が、世界遺産登録へ開花させることを祈念して、この地をあとにいたしました。

次に、国登録有形文化財の「ときわ荘」で、日本家屋と庭園を眺めながらの昼食をとり、碓氷峠のめがね橋、「峠の湯」で汗を流し、懇親会となりました。

この企画はフォーラム委員会の企画見学会で、それぞれの体力に合わせ、無理の無いプランで、皆和気あいあい楽しい1日となりました。

文 長谷川 亨



富岡製糸場



碓氷峠眼鏡橋にて

## 第19回 AACCA賞作品募集 第8回 芦原義信賞作品募集

募集期間 2009年7月1日(水) ~ 9月25日(金)

### AACCA賞

(社)日本建築美術工芸協会は建築家、工芸家、その他多くの芸術家、デザイナー達が互いに連携協力し、芸術性豊かな環境と景観の創造を目的として、わが国の文化向上に寄与する事を願い設立した団体であります。

AACCA賞はこの協会の理念と目的に合い、優れた芸術的環境を創った個人の作家、作家グループまたは団体を毎年表彰する賞であります。

### 芦原義信賞

芦原義信氏は本会の創立者で、日本の街並み景観形成、芸術的環境形成に多大な功績を残されました。芦原義信賞は氏の業績を記念し、優れた創造的環境と景観形成に寄与した未来ある新人を選び、表彰する賞であります。

### 応募規定

- ① 本賞の対象となる作品は、本会の設立理念に沿う作品である事。単体、複合を問いません。
- ② 応募者はAACCA会員とします。また、応募時に入会手続きを終了している者を含みます。
- ③ 応募者は個人、グループと団体、いずれも可とします。

### AACCA賞・芦原義信賞 選考委員

選考委員長	澄川 喜一 (彫刻家・元東京芸術大学学長)	選考委員	藤江 和子 (インテリアプランナー)
選考委員	岡本 賢 (建築家)	"	近田 玲子 (照明デザイナー)
"	加藤 貞雄 (美術評論家)	"	芦原 太郎 (建築家)
"	村井 修 (写真家)	ゲスト選考委員	松永 真 (デザイナー)
"	小倉 善明 (建築家)		

主催 (社)日本建築美術工芸協会  
後援 (社)日本建築学会・(社)日本建築士連合会

応募申込先・お問合せ先  
社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館6F  
TEL:03-3457-7998 FAX:03-3457-1598  
E-mail:info@aacajp.com

## aacca主催展覧会「21世紀 絵画・手の仕事」開催のお知らせ

会期 2009年10月8日(木) ~ 11月4日(水) (丸の内アートウィーク共催)

主催 (社)日本建築美術工芸協会 協力 三菱地所(株)

場所 丸の内行幸ギャラリー

出展者 グループ「手の会」 14名  
・大嵐貞男 ・河村純一郎 ・北薮和夫 ・黒瀬道則 ・甲谷武  
・小嶋勇 ・櫻井孝美 ・笹岡敏明 ・十河雅典 ・藤原和子  
・堀 晃 ・森竹己 ・安原竹夫 ・山田展也

(社)日本建築美術工芸協会は、この度、当協会として、美術展覧会「21世紀 絵画・手の仕事」を開催いたします。かねてから優れた現代作家たちによる美術展を念願していましたが、三菱地所(株)様のご協賛を得て、丸の内行幸ギャラリーという広い公共空間を会場に14名の作家の結集が叶い、この展覧会が実現しました。14名の出品作家は1970~80年代に現代日本美術展、日本国際美術展、安井賞展などのコンクールでの受賞など、華々しく活動、輝かしい足跡を残しています。その後もたゆむことなく研鑽を重ね、若いときから団塊世代となって熟成した今日も、後進を指導しつつかつての若々しい表現への意欲を燃やして制作をつづけています。

この展覧会は、今日安易に行われている“手”を忘れてコンピューターに頼る“アート”に対する異議申し立て、あるいは“手”の復権への狼火と見えるかも知れません。

このような場を設けたことが、今日の文化の状況に何らかの刺激を及ぼすことを願っております。

会長 中島昌信

# 新入会員・会員の移動・その他

## 個人会員

(2009年4月～2009年7月 入会・敬称略)

川岸梅和	〒275-8575	千葉県習志野市泉町1-2-1	☎047-474-2498	日本大学生産工学部創生デザイン学科川岸研究室
高柳登美	〒357-0043	埼玉県飯能市前ヶ貫265-61	☎042-974-2637	
本田純子	〒135-0061	東京都江東区豊洲5-6-15-6F	☎03-5144-3851	(株)川島織物セルコン インテリア事業部
政田俊夫	〒191-0062	東京都日野市多摩平5-15-10	☎042-584-9844	
笹岡敏明	〒369-1216	埼玉県大里郡寄居町富田3568-6	☎048-582-4482	すいどーばた美術学院
大成 浩	〒192-0023	東京都八王子市久保山町2-29-8	☎042-691-8046	
山田展也	〒377-0003	群馬県渋川市八木原591-2	☎0279-24-6082	
大島貞男	〒363-0012	埼玉県桶川市末広2-9-11	☎048-728-1128	
北薮和夫	〒590-0504	大阪府泉南市信達市場2622-5	☎072-483-4996	府立佐野支援学校
黒瀬道則	〒480-0102	愛知県丹羽郡扶桑町高雄中郷321	☎0587-93-5115	
甲谷 武	〒516-0061	三重県伊勢市宮川2-3-7	☎0596-28-8657	
小嶋 勇	〒810-0062	福岡県福岡市中央区荒戸3-3-20-904	☎092-781-0283	
櫻井孝美	〒403-0004	山梨県富士吉田市下吉田830	☎0555-22-0635	
十河雅典	〒311-0111	茨城県那珂市後台2969-6	☎029-295-4130	
藤原和子	〒520-0503	滋賀県大津市北比良1201-5	☎077-596-2155	
堀 晃	〒759-6303	山口県下関市豊浦町宇賀7378-4	☎090-5692-3597	
安原竹夫	〒344-0066	埼玉県春日部市豊町3-7-30	☎048-736-6560	
河村純一郎	〒745-0851	山口県周南市徳山福田寺原4757	☎0834-21-8770	

## 新理事

押部隆利 TOTO (株) コミュニケーション本部 本部長 ← 前任者 中里晋一郎 氏 (同職)

### QACC理念

建築家、美術家、工芸家その他の人びととの連携と協力により、豊かな芸術的環境の創造と保存を図り、これを通じて日本文化の向上、発展に寄与する。

### 会員投稿記事募集中

会員の皆様の作品紹介、活動報告、展覧会、個展等のご案内  
企業の広告・出品展等のご案内を会報に掲載いたします。  
詳しくは事務局にご相談下さい。

### 会報について

会報へのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(広報委員会)

発行 社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014  
東京都港区芝 5-26-20 建築会館6階  
Tel 03-3457-7998  
Fax 03-3457-1598  
Url <http://www.aacajp.com>  
E-mail [info@aacajp.com](mailto:info@aacajp.com)

編集 広報委員会  
長谷川 亨 石田 真人 北村 孝昭  
瀬川 秀之 竹生田 正 中村 弘子  
野口 真理 山崎 輝子

事務局

印刷 美和野印刷株式会社